

# ふれあいの祭典 兵庫短歌祭

## 加古川総合文化センターにて



### 第192号

題字 出口 草 露  
発行者 〒679-5322 佐用郡佐用町上石井685 安藤直彦方  
兵庫県歌人クラブ  
会計 〒655-0039 神戸市垂水区霞ヶ丘5-1-14 池本登代子  
振替 01110-5-6903  
印刷所 ㈱ 甲南堂印刷

### 文部科学大臣賞

## 青田 綾子 さん (神崎郡)

### ジュニア部門兵庫県知事賞

## 益田ひかり さん (兵庫県立多可高等学校)



自作を披露する学生さんたち

ふれあいの祭典「兵庫短歌祭」が、11月22日(土)午後1時から加古川市で開催された。入賞者の表彰式、作品の講評に続き松田和薫氏の講演、万葉歌の朗詠、琴・尺八の演奏が披露された。

ふれあいの祭典・県民文化普及事業「兵庫短歌祭」が11月22日(土)午後1時から加古川総合文化センター大会議室で開催された。当日は天候にも恵まれ、中高校生の参加も多くあった。司会是小林幹也、高井忠明両氏。

まず、安藤直彦歌人クラブ代表による開会の挨拶から始まった。「平成の歩みと共に始まったこの会も26回を重ねて歴史深い加古川市で開催されることを嬉しく思う。若い中高校生から高齢の方々まで短歌という形式を通じて一堂に会し共に学べるこの一日を有意義なものにしたい。」続いて加古川市副市长市村裕幸氏より歓迎のことばと共に「文化が街の魅力であり、人と人、心と心の交流に繋がっていく。この機会に短歌の表現力を全国に発信させたい。」とあり、次に兵庫県芸術文化協会業務執行理事は川哲秀氏より「今年も県下23の文化事業が、心豊かな兵庫の人づくりを目指して開催されている。歴史豊かな短歌を、今後多くの人々に親しんでもらいたい。」と述べられた。



岸田さん(左)、青田さん(右)

平成26年度の短歌祭応募作品数は、一般の部425首、ジュニアの部523首。一般の部入賞者13名、入選5名、佳作15名。ジュニアの部入賞者10名、入選12名、佳作29名が受賞し表彰状と副賞が授与された。ジュニアの部では、自分の作品をマイクを通して発表し大きな拍手を受けた。講評は、一般の部を中川昭、西橋美保、松田辰子、兼貞靖行各氏が担当。ジュニアの部を尾崎まゆみ氏が担当した。

休憩の後、日本文芸家協会会員の松田和薫氏より「印南野の万葉歌・風土記」と題する講演があった。「万葉集に明石や加古川、稲美町辺りの歌が多いのは、畿内から畿外へ向かう心境を歌に託したからだ。柿本人麿が「燈火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず」と詠んでいるが、明石海峡は流れが速く難所でも西に下る寂しさが表れている。同じく人麿が「天離る鄙の長路ゆ恋ひ

来れば明石の門より大和島見ゆ」と都に帰る喜びを詠んでいる。当時は陸路が整備されていないしかなかったため海路の往来が多く海からの歌が多い。などスライドを使用しての興味深い講演であった。(詳しい内容は2〜3頁に記載)

続いて万葉の時代の装束を纏った前田昭子氏が「名くはしき稲美の海の沖の波千重に隠りぬ大和島根は」他の万葉歌を朗詠。箏鈴木晴椰氏社中尺八西無山氏による箏曲「万葉歌が披露され、しばし会場は万葉の世界へと誘われた。

前田昭子副代表の閉会の挨拶の後、午後4時30分兵庫短歌祭は終了。参加者は約200名。盛会であった。

(矢内温代)



会場風景(安藤代表挨拶)

松田和薫氏講演

「印南野の方葉歌・風土記」

松田氏の話は「テーマが大きいので時間内にどこまでできるか分からな

稲日野も行き過ぎかてに思へれば心恋しき加古の島見ゆ

柿本人麻呂(巻三二二五三)

スライドで横書き向きの表記がなされていた歌番号などは、氏の著書『印南野だより』(二〇一〇年二月)によつて、縦書き向きに修正させていただいた。ただし、和歌の表記、用字などに



日本文芸家協会・芸術文化団体印南野半どんの会代表 松田和薫氏

ついで、スライドをもとにした配布プリントの通りとする。氏が「稲日野」「印南野」の地名について触れられたように、特に「イナミ」という地名については、作品の鑑賞にも関わってくるからである。

この作品のスライドでは、歌聖とされる人麻呂(人麿)を祭った柿本神社が映される。『播磨国風土記』では、十二代景行天皇が播磨に来て、土地の別嬢を召そうとしたときに、別嬢はそれを拒んで島に隠れたという伝説がある。

名くはしき稲見の海の沖つ浪千重に隠りぬ大和島根は

柿本人麻呂(巻三二二〇三)

「はしき」は「美しい」の意。乗っている船が西へ進み、自分のふるさとの大和の国が見えなくなったときの作品である。当時は朝鮮半島や中国との関係で、太宰府に遠の朝廷を置いていたこの瀬戸内海を行くのは命懸けの仕事で、幅四メートル、長さ十二メートルぐらいの手こぎの船(常陸国風土記)で行く。船で一か月かかったつらい悲しい旅路であったが、当時の陸路はまだ十分整備されていなかった。

不欲見野の浅茅押なべさ寝る夜のけ長くしあれば家し惚はゆ

山部赤人(巻六六九四〇)

赤人は人麻呂同様、歌聖とされる。聖武天皇が印南野に行幸になったとき神亀三年に今の明石市長坂寺跡あたりに仮の宿をたてた。浅い茅葺を押し伏せて寝るといふ寂しい歌。晩秋のころ、家のことを思いながらしみじみと詠んだ歌である。「け」は「日」。二日以上になれば、「日」を「け」と読んだ。

印南野は行き過ぎぬらし天伝ふ日笠の浦に波たてりみゆ

詠み人知らず(巻七二二七八)

「印南野」は明石川右岸と加古川左岸の間を稲美野台地。旧明石郡から大塩の塩田あたりまでを言った。

明日よりは将行の川の出でて去なば留れる我は恋ひつつやあらむ

詠み人知らず(巻十二二二九九)

明日からは、「将行」の川のように出ていかれるあなたを恋う、という印南の乙女の歌で、寂しい感じがある。

京都府と兵庫県境にある遠阪峠から南へ流れる川が、JRの船町駅あたりで篠山川などの支流を飲み込み、やがて播磨へと流れる。この西国一の川、加古川はたびたび氾濫し、流れが変わった。この歌は大河がゆうゆうと時空を越えて流れる様を思わせ、最も好きな歌の一つである。

燈火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別

Table with 4 columns: 結社(グループ), 会場, 内容, 問い合わせ先. Rows include 明石短歌会, 芦屋水裏短歌会, かしの木短歌会, 海市短歌会, 玲瓏関西歌会, ポトナム短歌会(須磨歌会).

れなむ家のあたり見す

柿本人麻呂(巻三二二五四)

明石大門は明石海峡のこと。紀伊半島から流れる本流と、淡路の西側から流れる流れとがぶつかる、旅人にとっては非常に危険な場所。葛城などの山がみえなくなるなか、波が高くて危険であった。ここで、妻子のことが思い出されたのである。

大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ

柿本人麻呂(巻三二一三〇四)

「あり通う」は人々が常に行きかっている。「島門」はここでは淡路と明石の間。「神代」は特に『古事記』に詳しく記される国生み神話で、なかでも淡路島を生む場面が思い浮かぶ。淡路島は神社が多く、多くの伝承が残っているところである。

行き巡り見とも飽かめや名寸隅の船瀬の浜にしきる白波

笠 金村(巻六八一九三七)

神龜三年の行幸の際の歌。スライドでは明石市指定文化財の住吉神社の門が映る。「住吉」は海路の安全をつかさ



万葉歌朗詠(前田昭子氏)

どる神で、宮の門の南に広い松林がある。「名寸隅」は契沖の説に、明石の「魚住」のことであった。行きつ戻りつ

いくら見ても飽きることがあるだろう。名寸隅の船瀬の浜にしきりに寄せてくる白波は、という意味で、陸地から海を見て詠んだ歌である。

万葉集を理解しようと思えば、海辺に行かないといけない。海辺へ行けば万葉人の思い浮かべたイメージがわき万葉人の心が理解できる。

天離る鄙の長路ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

柿本人麻呂(巻三二二五五)

これは瀬戸内海を東へと帰ってきたときの歌である。はるばる家を恋いなからやってくる、なつかしい大和の島山が見える。そのときの思いを込めて詠んだものである。

次にスライドにあつて、右に引用しなかつた作品のうちから二首をあげておく。

遅れみてわれはや恋ひむ印南野の秋萩見つづいなむ子ゆえに

阿倍太夫(巻九一七七七)

吾妹子が形見に見むを印南都麻白波高み外にかも見む

(巻一五二三五九六)

さて、講演でのスライド使用はいったん終わり、この後はプリントの使用に移る。ただし、時間の関係で、詳しい説明を割愛されたところも少なくないようである。ここでは、プリントの中から、『播磨国風土記』の前記万葉歌

万葉の調べを奏でる(箏曲鈴木晴柳氏ら・尺八西無山氏)



に関係する別嬢についての説明部分のみを引用させていた。ただ、こととする。

\*古代の壮大で愛に満ちた物語

印南別嬢は

豪族吉備一族の才媛で、見目美しく、聡明できらきらしかった。端正とは内から滲みでる美と知のことである。才色兼備の姫のことを大帯日子がお気に召されて、都から逢いに来られ、姫は加古川の河口の島に隠れる。あきらめ切れずに皇子は探し続け、姫の飼犬が鳴いたことから姫と逢われた。この嶋を南毘都麻と名付けられた故事である。二人は結婚され日本武尊をもうけられ、日本平定に名をのこされた。

この講演のあと、稲美町で文化活動をしておられる前田昭子氏の朗詠があつた。万葉歌の「名くはしき稲見の海沖つ浪千重に隠りぬ大和島根は(柿本人麻呂 巻三・三〇三二)家にしてわれは恋むな印南野の浅茅が上に照りし月夜を(詠み人しらす 巻七・一七九)である。

箏曲の「万葉歌印南野」が続き、尺八が西無山氏、箏が鈴木晴柳氏、および社中の小原幾久美氏・山口みどり氏によって奏でられた。

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
糸 ちうど 揖西 歌会	揖西公民館(たつの市)	第4金曜	079(236)6806 上田 一成
明石大門歌会	明石市立勤労福祉会館	第1土曜、午後1時	078(781)0846 森嶋 郁子
小野短歌会	コミュニティセンターおの(小野市)	第1日曜、午後	0794(62)2846 松尾 鹿次
下東条短歌教室	コミュニティセンター下東条(小野市)	第4日曜、午後	
東条短歌会	東条公民館(加東市)	第2日曜、午後	
美加志保巨勢教室	巨勢教室(加東市東古瀬)	第3日曜、午後	
ひだまり歌会	大阪市立総合学習センター	第2火曜、午後1時	0797(84)8881 桂 保子

# ふれあいの祭典 兵庫短歌祭 入賞作品選評

## 文部科学大臣賞

青田 綾子 (神崎郡)

・家一軒覆いつくして咲ける葛離散家  
族のその後を知らず

野なかの一軒家を葛が覆っている。美しく捉えると緑の館。葛の花が咲き匂う。ひとつの物語として去来する。

最近とみに多くなった空き家 手入れのない庭木 生い茂った草 管理者も出来ないだろう。売却も取り壊す事も聞こえた。曾ては子どもの元気な声も聞こえた。平和な家庭に温かい家族が住んでいた。今は住む人も訪れる人もいない。この葛の家にも華やかな過去があり長年の歴史があつたに違いない。現代は独居老人の家も数ある。やがてはと淋しい思いだ。葛の花が灯る。

## 兵庫県知事賞

岸田美知子 (豊岡市)

・真つ白な洗濯物が吸い込みし夏の日向の匂いを畳む

「真つ白な洗濯物」から清潔なシーツやシャツが庭に干されているイメージが浮かぶ。これらの洗濯物が「吸い込みし」は巧みな表現である。吸い込んでいるのは「夏の日向の匂い」である。日の光の温もりが残っている匂いは気持ちが良い。

作者は日中の草取りなどの仕事を終え安堵し、快い気分洗濯物を畳んで

いる。

私は視覚と嗅覚がとらえた夏の夕暮れの情趣にひたつた。(足立勝蔵)

## 兵庫県議会議長賞

野添 一男 (西脇市)

・さよならと言わずに「またね」と母の手をにぎれば返す握力たしか



野添一男氏

作品から見える背景は、母子は一緒に住んでおらず、母はある程度の高齢の方、もしかするとケアハウスへ入所されているのかも知れない。言葉の選択に無駄がなく、すべて具体で通しているところがいい。特に「さよなら」と言わずに「またね」が作者の微妙な深層心理を的確に表現していて、鑑賞する側にもストロートに思いが届く。母の手をにぎればと平仮名にし、握力との重なりを避けたところも工夫があるこのように普通の言葉で表現し、誘引力のある短歌をいいうたと言っている。(藤岡成子)

## 兵庫県教育委員会賞

小川寛美子 (高砂市)



桂日呂志氏

静かで、悲しみの深い歌である。癌のため早く逝った娘を思っているのがある。脈搏を見れば、体調によりその数・強さ・規則性が変動するので、娘の病状を知る手がかりとなる。やがて死にゆくであろう娘の病室で付き添って寝たあの夜は、窓外で鳴く馬追の声

が聞こえていた。その声、今も作者

・末期癌病める娘の脈とりて添ひ寝せし夜の馬追ひの声

桂 日呂志 (加東市)

## (公財)兵庫県芸術文化協会賞

・我が足に添わない靴を履くような人の輪におり逃げ出せなくて  
何かのグループであろうか。きつと作者は単なる傍観者としていたかたはずだが、軽い気持ちで踏み込んだのが運の尽き、退つ引きならない状況になつてしまったのだろう。三句目から四句目へのつながりが、文脈的にはねじれがあり、不安定さは否めないが、「足に添わない靴」という捉え方により違和感から逃げ出せない作者の困惑ぶりがありありと目に浮かぶ。守ろうとしてきたはずのアイデンティティのようなものは案外、些細なことをきっかけに崩れるものだ。合わない靴は「靴擦れ」の元だもの。(たなかみち)

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
潮音神戸歌会	三宮勤労センター(中央区)	第1土曜、午後1時	078(441)3740 石橋 妙子
花鏡さぼてん教室	三宮サンケアホーム	第1火曜、午後1時	
花鏡木曜教室		第2木曜、午後1時	
花潮会		第3火曜、午後1時	
KCC舞子短歌教室	KCC舞子(垂水区)	第3水曜、午後1時	
CO・OP文化センター短歌教室	生活文化センター(東灘区)	第2火曜、午後1時	
東浦短歌会	東浦老人福祉センター(淡路市)	第2木曜、午後1時30分	0799(74)2141 片山田佳子



左より稲田・嶺重・芦田・山田・藤原の各氏

の心に残っているのである。  
 馬追は、体全体が緑色で頭頂及び前胸背面が褐色の昆虫。小型で触覚が長く体長の倍近い。鳴き声は「すいっちよ」と聞こえる。  
 (尼子勝義)

**加古川市長賞 稲田政子**(養父市)

・幼ごの描く絵がいつしか一人から二人になりて手をつなぎおり  
 作中の「幼ご」はお孫さんであろうか。「幼ご」は幼子で良いのでは。描いている絵は自画像かなと思いつつ温かく見守っていた作者だが、少し目を離れた隙に絵の中の人物が二人となり、而も手を繋いでいるのだ。相手はパパかしら、ママかしら、いい私。作者も共に絵を楽しんでいる。一首にほのぼ

のとした温かいものが流れていて、読者をも、えも言われぬ幸せ感に包んでくれる歌である。平明にして慈愛溢れる佳い歌。  
 (三津野幸代)

**加古川市議会議長賞**

**芦田 礼子**(姫路市)

・スマホ画面に深く入りていし青年がすいと現世に戻り下車せり  
 「画面に深く入る」「すいと現世に戻る」電車の中でよく見かける様子を、この二つの言葉でうまく表現している。スマホにむかつて何かをしている者は確かに架空の世界に入り込んでいて、それもかなり深く入つてしまつていようである。しかし、電車から降りる時にはさつと実体の世界に戻る。それをまるで水中に潜つていた人が、水面に現れたかのように「すいと現世に戻る」と表現している。青年がその両方を自然に行き来している様子をうまく捉えている。もう少し推敲して字余り等の検討はしてほしいが！(竹村公作)

**加古川市教育長賞**

**藤原 町子**(美方郡)

・よくもまあ金婚までも持ちました洗い晒しのシャツの感触  
 話し言葉のような初句の軽やかさが結句まで自然に流れて、ユーモラスで楽しい一首。  
 空気のような二人とはよく言うが、「洗い晒しのシャツ」とは作者独特の発想で一首を際立たせている。  
 少し色あせてはいるが、柔らかく体に馴染む着心地の良いシャツ。足が地についたその生活感から、飾り気のない作者が彷彿とする。

私もまたそのような夫婦像をめざして年を重ねてゆきたいと思う。  
 (吉田千代美)

**神戸新聞社賞 秋本 多恵**(岐阜県)

・戦ひの地にある子らが映される決してほほえみ浮かべぬ子らが  
 万博の頃、三波春夫さんの歌「世界の国からこんにちには」という歌に心を弾ませた時があったが、最近テレビの放映する世界の状況に心が痛まぬ日が無い。その中でも最も痛切な怒りや悲しみを誘うのは戦争の被害を直接受けている子供達の姿の映像である。経済格差や貧困が引き起こす戦争も多いと聞く。戦争や内戦の巻き添えで笑顔を失つた多くの子供達が直面している命の危機。難しいテーマをテレビという情報機器を使って身近な問題としていえるのに感心をした。(伊藤佐重子)

**兵庫短歌祭実行委員会賞**

**塩澤 文子**(姫路市)

・「寂れたね」なんてあいさつ島を出た貴女にだけは言われたくない  
 仲良しの友だるうか、久しぶりに会った時に交された何気ない挨拶だったかその突き放すような言葉が気に障った。その一因はどんな事情があったにせよ島を出た彼女にもある。そんな押さえきれない感情を昂ぶらせる。作者は島を出ずに島を守ってきた強い自負があった。認めたくはないが認めざるを得ない本音の歌である。(清水昭男)

**兵庫県歌人クラブ賞**

**西田 弘子**(豊岡市)

・吾れを産み日だちすぐれず逝きしとふ母よわたしはすこやかに老ゆ

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
銀の道短歌会	生野メインホール(朝来市)	第3火曜、午後1時	079(672)2334 中島眞喜子
さくら木短歌会	枚田岡会館(朝来市)	第3日曜、午後1時半	
姫路水甕歌会	姫路市民会館 指導 小畑 庸子	第3土曜、午後1時	079(232)4003 生田よしえ
香寺短歌会	姫路市香寺公民館	第2水曜、午後1時	
文学圏社	姫路花の北市民広場(姫路市)	月初めの午後	078(961)5676 浮田 伸子
未来・トアロード歌会	神戸市勤労会館	第1火曜、午後1時	078(792)9057 河村 公美
心の花兵庫歌会	みつなかホール(川西市)	第1土曜、午後2時	072(794)3083 足立 晶子



(左) 西田さん、(後) 小松さん

重い内容を淡々と詠って読む者の胸を打つ。下旬の「すこやかに老ゆ」には、亡き母への感謝の気持ちも込められているだろう。医学の発達と共にひだちと言葉が通用しない世代もあり、そうした視点から眺めると社会詠の側面をも含んでおり幅の広がる歌。日だちは、肥立ち、ひだちが良かったのでないかしら。三句の「とふ」の一語の働きが際立っていて人生の見える、しみじみと味わい深い秀歌である。

**同賞 演 守 (朝来市)**  
 ・無防備と言はばむばうび理髪師が今し剃りゆく静脈の上  
 理髪店でひげを剃ってもらう。ありふれた日常の一齣にそろりと入り込んだ思念。その気付きに慄然としながら如何ともし難く、一見心地よさそうに剃刀の動きに身を委ねている。この違和を作者は嗜虐的に楽しんでいるのだろうか。非常に気になる一首である。一読して首のあたりに冷たい風が吹く。理髪店、公衆浴場、日本は平和なのだと思う。

ただ、上二句は言い過ぎの感が否めず、解説口調になっているのが気になる

◇2014年度ふれあいの祭典―兵庫短歌祭作品審査  
 ◇兵庫短歌祭実施要領の検討  
 式次第・主催者等挨拶・表彰式・選考経過報告(司会進行の中で)  
 作品講評(中川・西橋・松田・兼貞)  
 講演(松田和薫氏「印南野の万葉歌・風土記」スライド映写)  
 朗詠(前田昭子氏) 万葉歌の箏演奏(箏・鈴木晴椰氏、尺八・西無山氏等)  
 当日の役割分担・準備等について

◇2014年10月17日、兵庫勤労市民センターにて開催。(公財)兵庫県芸術文化協会より2名、兵庫短歌祭開催地加古川市より2名、出席幹事23名。委任状7名。司会黒崎由起子氏。各代表の挨拶に続き、議長に兼貞靖行氏を選出し、議事に移る。

2014年度 第2回幹事会報告

◇2015年度神戸短歌祭について  
 歌人クラブ総会及び兵庫短歌賞(新人賞)表彰  
 シンポジウム「短歌にとつて(美)とは何か―阿木津英氏を囲んで(案)パネラー:阿木津英・江畑實・中川昭各氏他(未定)  
 ◇年刊歌集54集刊行11月14日発送  
 ◇会報192号12月15日発行  
 ◇次年度兵庫短歌祭開催地(受入自治体) 姫路市にて2015年11月14日  
 ◇第4回歌集批評会 2015年2月21日(土) 久米川孝子『ことばの銀河』(落合けい子) 武富純一『鯨の骨』(小谷博泰)・司会(未定)  
 ◇伝統文化体験フェスティバル 2015年3月7日(土)・8日(日) 於:県公館

◇2014年度(中島真喜子) 小松カツ子(姫路市) 真夜中の足長蜘蛛は己が影抱きしてしるき天井を這ふ  
 蜘蛛は害虫の天敵(益虫)だがその風貌と長い脚が不気味と嫌うひとが多い。その蜘蛛が天井を忍者的ように音もなく這っている。ここは蜘蛛でなくてはならない。ヤモリやゴキブリでは歌にならない。「真夜中の」と「しるき」の色彩「明暗」の対比が利いている。白い天井は人工の近代の清潔で無機質な冷たい心象の比喩だ。その白に蜘蛛という「自然」を配置してバラン

スを取り、それを背景に「自分の影を抱くもの」という普遍のポエジーが詠まれている。(飯田 進)  
 入選(5名) 山中洋子(三木、谷垣わき糸(加西)、川崎弘子(豊岡)、水野美子(姫路)、山本みさよ(神戸)  
 佳作(15名) 鈴木紀子(川西)、若林久子(神戸)、芝地裕子(豊岡)、加藤政輝(尼崎)、石田勝啓(たつの)、金井久代(加西)、佐藤純子(養父)、黒木悠人(京都)、矢内温代(神戸)、小山悦子(朝来)、森 聰子(尼崎)、有本保文(明石)、石田フサ子(赤穂)、久米川孝子(高砂)、内田みゆき(加西)

結社(グループ)	会 場	内 容	問い合わせ先
コスモス 藍 の 会	姫路市民会館	第2土曜、午後1時	079(448)0895 久米川孝子
コスモス 加 西	中央公民館(加西市)	第2土曜、午後1時	0790(42)0415 藤岡 成子
コスモス 姫 路	姫路市民会館	第3日曜、午後1時	079(269)0513 飯田 進
コスモス 葛 の 花	八千代プラザ(多可町八千代区)	第2水曜、午後1時	0795(37)0680 岸本しげ子
白 珠	滝野公民館(加東市)	第2水曜、午前	0795(48)3679 片山 洋子
宝 塚 白 珠 の 会	宝塚東公民館(宝塚市)	第3火曜、午後1時	072(794)0614 星野 敏江
神 戸 白 珠 の 会	六甲道市民センター	第2水曜、午後1時	0797(32)8462 東 昌子

ジュニア部門入賞入選作品選評

安藤直彦

今年のジュニア部門は昨年とほぼ同じ、36校、523首の参加をいただいた。昨年もそうであったが、全体的に作品がのびのびとしていて「やらされている」といったことでなく、自分の自然さの中で、客観の目をもって表現しているということに感心させられた。「日本の心」ともいうべき文化が次世代に継承され、人間形成に資しているということ、先生方のご指導の賜物と感謝申し上げる。

・ひまわりの畑の中から見えかくれしている小さな麦わら帽子  
この歌の味わい、広がりを生んでいるのは「畑のなか」からであろう。「から」が「に」であればそれだけの歌になってしまう。大きく咲いたひまわり畑を作者はやや離れて見ているのだろうがあるいは「小さな麦わら帽子」はもう一人の自分の投影か。

兵庫県知事賞

兵庫県立多可高等学校

益田ひかり

・溶けかかる赤と白のかき氷君のスプーンがさつくりくずす  
「赤」はイチゴ、「白」はミルクである。それぞれ別の器のものか、一つのものかはわからないが、「溶けかかる」「さつくりくずす」と見ているところに「君」への眼差しがそそがれている、さりげない中に、微妙な心模様がある。



益田ひかりさん

簡潔平明に表現されている。

兵庫県議会議員賞

兵庫県立上野ヶ原特別支援学校

仲宗根琉奈

・好きだとか嫌いだとかのその前にあなたは私知っていますか  
わが思春期のころ、賢くてきれいな女子にわが意思表示をしたが、この歌のようなことを言われそうで何もできなかつたことを思い出します。こうした経験は大方の「男」にあるもので、なるほど、共感を呼ぶところがこの作の吸引力になっているのだろう。

兵庫県教育委員会賞

西脇市立黒田庄中学校

藤本 芽来

・けんかした日々も今では大切なピースの一つジグソーパズル  
バラバラになっているものを組み合せて一つのまとまったものに仕上げている。

兵庫県芸術文化協会賞

尼崎市立成良中学校

関山 聖子

・けんかした日々も今では大切なピースの一つジグソーパズル  
バラバラになっているものを組み合せて一つのまとまったものに仕上げている。

いく、その一つ一つがあつて今がある。そんな実感をジグソーパズルになぞらえて言い得ている。ケンカもよき絆になつていくことも若いときならではのことであろう。「ピースの一つ」が効いている。

加古川市長賞

姫路市立安室中学校

嶺重 悠

・官兵衛はこの地に立って来たのか  
備中高松も立つ  
備中高松城の水攻め、黒田官兵衛の策という。その地に立って青春の気風は往時に思いを馳せる。大柄に大胆に簡潔平明に出来ていて心地よい。「備中高松も立つ」が決まっている。「悠」さんは女子か男子か、作者の性別によっても味わい方は違って来る。



入選の左から間倉さん、長尾さん、小椋さん、嶋田さん

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
てのひら	NPO法人てのひら(高砂市)	第1土曜、午後	079(442)2476 石原 智秋
青山短歌グループ	立花公民館(尼崎市)	第2木曜、午後1時	06(6429)5158 たなかみち
高嶺(神戸支部)	神戸市婦人会館(中央区)	第3土曜、午後1時	078(927)4439 伊藤 敦子
茅花短歌会	ふれあい交流館(稲美町)	第2水曜、午前9時30分	079(492)1766 前田 昭子
波濤神戸	三好弥寿子宅(長田区)	第4木曜、午後(原則)	078(612)9294 保田 ひで
東加古川短歌会	加古川総合文化センター(加古川市)	第2金曜、午後1時	079(293)0956 水野 美子
ちぬの海短歌会	中央公民館(尼崎市)	第2金曜、午後1時	06(6411)6516 内井 幸子

加古川市議会議長賞

加古川市立陵南中学校

山田萌々香

・いくつもの奇跡偶然重なって私が生まれあなたに会えた  
自我のめざめの青年期はこうした一つ一つの認識の重なりを経ていく。そして今の自分を踏まえる。それが偶然の重なりなのか、あるいは神の定めた必然と受け止めるようになるか、人の出会いとは不思議なものである。「あなたに会えた」に歌が生まれる。

加古川市教育長賞

加古川市立平岡中学校

妻鹿 紗和

・新しい服を買ったらシャランゼリゼ鏡の向こうはペイネの風景  
フランス風のおしゃれな服を買って気分浮き浮き、姿見の鏡の向こうの風景はまるでペイネの絵のように見えていて、こう読みとった。なかなか粋な作りになっている。どこかに類型がありそうでもあるが、こうした作りは読者の心をも浮き立たせてくれる。

兵庫短歌祭実行委員会賞

神戸市立歌敷山中学校

神田 典佳

・風揺れて木漏れ日揺れて森光る優しい夏の手紙が届く  
初夏のさわやかな生命感あ

ふれる自然に身を置いて、優しさあふれる(あなたからの)手紙を読んでみるのだから。名詞が5つ、動詞が4つ、形容詞1つとにぎやかだが、それらがうまくまとまり小世界を生み出している。中学生にして客観の目が開かれている。  
兵庫県歌人クラブ賞  
小野市立旭丘中学校  
井上 創太

・よかつたな僕と出会った古本よそうじゃなければ今も本棚  
こういう出会いもあるんだ。こうして出会った一冊の古本が人の生涯にかけがいのない意味を持つこともある。人と本との慕わしい関わり、いかにも本好きの作者が出ていて「古本」が息づいている。出会いによって眠っていたものが急に生を帯びる、人もまた。



井上 創太さん

兵庫県歌人クラブ賞

武庫川女子大学附属高等学校

宮本 知夏

・青い夏夢へのベース踏みしめて大きく見えた彼らの背中  
中



佳作の皆さん(一部)

「青い夏」とは青春の活気あふれる夏、「夢へのベース」とは甲子園出場への夢、であろう。その夢に向けて猛練習をしている「彼ら」をたくましく見ていたのだ。事柄を比喩的、象徴的に表現しているところがいい。「見えた」は単なる思い出ではないだろう。

入選 (12名)

赤穂市立有年中学校

塚本 真衣

加古川市立陵南中学校

嶋田玖瑠美

神戸市立歌敷山中学校

増田 雅弓

宍粟市立波賀中学校

小椋 奏

兵庫県立山崎高等学校

植田 奈々

兵庫県立山崎高等学校 中山 春奈  
兵庫県立山崎高等学校 長尾 峻平  
佐用町宍粟市組合立三土中学校 近嶋 七海

兵庫県立姫路聴覚特別支援学校 森本 瑞歩  
明石市立大蔵中学校 渡邊 真衣  
加東市立滝野中学校 間舎沙生里  
兵庫県立山崎高等学校 朱山 和花

【参加校】 (五十首順)  
相生市立矢野川中学校、明石市立大蔵中学校、明石市立一見中学校、赤穂市立有年中学校、尼崎市立成良中学校、小野市立旭丘中学校、小野市立小野南中学校、加古川市立平岡中学校、加古川市立両荘中学校、加古川市立陵南中学校、加東市立滝野中学校、加東市立東条中学校、加東市立社中学校、香美町立村岡中学校、神戸市立井吹台中学校、神戸市立歌敷山中学校、佐用町宍粟市組合立三土中学校、宍粟市立波賀中学校、高砂市立松陽中学校、多可町立中中学校、宝塚市立安倉中学校、東洋大学付属姫路中学校、西脇市立黒田庄中学校、姫路市立安室中学校、姫路市立坊瀬中学校、姫路市立増井中学校、三木市立三木中学校、三木市立緑が丘中学校、武庫川女子大学付属中学・高等学校、兵庫県立上野ヶ原特別支援学校、兵庫県立姫路聴覚特別支援学校、兵庫県立芦屋高等学校、兵庫県立神戸北高等学校、兵庫県立篠山産業高等学校、兵庫県立多可高等学校、兵庫県立山崎高等学校

(以上36校)

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
水 瓊 明 石	人丸堂3階(明石市魚の棚)	第1土曜、午後1時	078(914)0078 向山 明子
奥 播 磨 短 歌 会	加美プラザ(多可町加美区)	第3土曜、午後1時	0795(35)0489 西川 洋子
新 月 芦 屋 支 部	西宮北口生活消費センター5F	第3土曜、午後1時	078(733)8569 西村 郁
塔 姫 路 歌 会	城南公民館	第2日曜、午後1時	0790(28)0158 稲垣 保子



平成二十五年年度

兵庫短歌賞応募作品品評

はじめに

安藤 直彦

応募作品四十九篇は気のもつた佳品であり、これらの作品のそれぞれの是非を再見し、良い歌の在り様を共有し今後に資したいと思う。もとより作品の良い評の在り様というものは、一筋でいかなないものであるが、評し評されながら互いのより良い在り方に向け、互いの研鑽の場の一つとしての意義を担うことが出来れば幸いである。作品の性格上、評者には当歌人クラブ顧問三氏と兵庫短歌賞選考委員八氏にお願いした。なお、兵庫短歌賞入賞作品四篇は前号に発表につき割愛させていただいた。

事実より隠された真実を見極めること

石橋 妙子

・とむらいの終れば母の非在という日常始まる秋深みつづ

岡田恭代

・そこここに電子アラム聞きながら整形外科に首吊られおり

この二首により作者の日常が直截に手渡される。二十首詠「蒼きりんどう」のなかにはきらりと光る佳品も多い反面、やや粗い表現が見えるのが惜しい。

・君逝くもあの日あの刻忘れぬ静かに見入るあの日の便り

星野泰山

・君逝きてありし面影しのびをり別れの詞ここに捧げん

短歌は読者との共同作業により息吹くもの。作者は自らの獨創性を大切にしつつ発想、言葉運びに心を砕くことが重要である。更に連作における起承転結の構成もなおざりにしてはならない。

・五枚にもなりたる手紙に季の切手伝はるでせうか控へ目のノック

杉本玲子

・海底の泡立つやうなカフェにてゆつくり味はふガテマ珈琲

微妙な深層心理を詩情ゆたかに表現していて、その力量は評価するところ。今後に期待するところ大である。

・胡瓜もみ白子干たつぷり振り込みて病室に持ち来夫の一品

伊藤芳津

・病室のピンクのカーテン翳りきて一人の長き朱夏の日は昏る

入院 手術、リハビリと入院日誌の一連であり、入院の緊張感、倦怠感などが表現されており、作者の心情も伝わってくるが、このような一連は報告詠の域をなかなか抜けられない所に落ち穴がある。記録詠として存在する為の工夫も必要。

完成度の不足とテーマ性の欠如

楠田 立身

「春によせて」

白井てる子

- ・耕せし土やわらかに湿り居て一雨ごとに春近づきぬ
- ・現生の惨事をよそに咲きそろうれんげ畑に白き蝶舞う

全体的に抑制が利いて連作としてのインパクトはないが安定感のある連作。  
〔命〕 矢野未代子

- ・命と言う不思議なものは何処からそしていずこに消えゆくものか
- ・気おちしてあせりが多くなる日あり短歌は私の味方か敵か

結句を疑問にして読者に預ける手法が三首あるが作者の述志が弱くなる。

〔随感随筆〕 西村 徹

- ・行革で後任のなき机には回覧文書が積まれてゆけり

- ・三人の客が同時にアクビせし車窓から見る土曜のホーム

連作でなく雑詠の群作の感がある。時間をスライドさせながら現代の風俗に迫る着眼は捨てがたいので推敲を重ねて完成させてほしい。

〔日常といふ非二チジョー〕

清水昭男

- ・戦争の体験といふ壁がある死する生きるを見詰めて来しか

- ・熟年と呼ばれる夫婦の調停日語らぬ日々線路錆びぬしか

結句の疑問の結びが掲出歌を含め四首。これでは奇抜な題に答えられない。現代を風刺する視線を研ぎ再構成したい。

秘すれば花なり（世阿弥『風姿花伝』）

再度の挑戦に期待したい

土居 正

- ・子の留守の電話フアクスに悩まされる新型なれど老いに「ゴウモン」
- ・最近のIT関連の進歩についていけない気持ちしが結句で鮮やか。

- ・一人居の午後のテレビの楽しみに「相棒」見る事六チャンネルの

事実を述べただけの作。「見る」は「観る」。この結句不要。結句を大事に。

- ・夕陽浴び我より大きな影連れて家路を急ぐ秋の夕暮れ

「大きな影」が効いており、類型になりそうなることを免れた。 関子利明

- ・新年の恵方三社初詣で拍手打ちて幸せ願う

上句で験を担ぐ気持ちは解るが、四・五句は当り前すぎて感動を削ぐ。

- ・あの時のあの声あの顔わが胸に亡妻の面影何時とて共に

- ・初・二句の畳みかけによつて、亡き妻への愛の深さが読者をも引き込む。

- ・寒風にチャリンコ漕ぎて妻の墓お線香見据えて夫婦の語り

- ・たどたどと大辞林へと迷ひ込むネットの界よりはじき出されて

奥田光子

- ・木漏れ日のやうなる柚子のみえかくれ盗らむ手首をまつ棘がさす

初句の直喩に共感するが、四句目「手首」は分りにくい。手が指がいい。

全体として言わでもがなの表現が、折角の佳品を台無しにしたものが見受けられた。また題名も作品の一つと考え、安直につけないように心懸けられたい。

歌はそれぞれ

田岡 弘子

池本登代子

「ルソーの森をゆく」  
 ・夕月を友とし深き森に入る風が静かに眠りはじめて  
 ・アンリ・ルソーが佇むやうな木の橋はレモン色した月がふさはし  
 詩的センス豊かに詠い上げた一連は魅力的である。渋谷の歌二首は異質の感じであったが「遅れつつ咲く一花」等女性らしい視点が有り「樹の声は大きくやさしく聞えくる空に伸びゆくいのちのゆとり」への歌境の広がりに注目したい。  
 「夏のおしゃれ」  
 ・熱き茶を志野の湯呑みに注ぎをれば春の陽ざしが手許を覗く  
 ・ぬばたまの夜空羽織りて声もなう眠れる街は我を匿ふ  
 平穩な日常の窺える気負いのない詠みが好き。難のない所が反面のインパクトの弱さかも。「幸せは届くところにある・・・」を深めた心象詠に期待する。  
 「ご飯やで」  
 ・「ご飯やで」LINEの電波が駆け上がり二階の子らが駆け下りてくる  
 ・近頃は食器洗いの段取りの工夫なんぞもやや愉しくて  
 妻・長男・次男・娘の他に犬も素材とし、今どきの家庭の様子を戯画化した切り口で描く。賛否あろうが「藝」に徹した作者の人間味が温かい。

伊藤絹子

「飯やで」  
 ・丹波路の天目楓は色あせるも土産物店の客寄せは続く  
 ・一世を風靡の歌手の他界後も吾はも少し人生いろいろ  
 身辺を素直な眼で捉え素材に暮しを証している。「・・・だみ声投げる」等状況の解りにくい作も。続けることで「赤ペンの添削」も少なくなるだろう。

武富純一

「深秋」  
 ・塩見俊郎

作品の出会い

小谷 博泰

桂 日呂志

「秘密保護法」  
 ・でこぼこの土間を大事に駄菓子屋の婆は昭和を語りて老いぬ  
 ・田に張りし氷踏み割り家鴨来る洗ふ冬菜の屑をもとめて  
 時代のさまざまの生活風景の描写が生きて生きている。連作冒頭の「反対せし秘密法案可決して脳裏をめぐる憲兵の声」をもう少し広げてほしかった。あえて言わずに、さらに深く時代の流れを感じさせようとしているのであろう。  
 「ふぞろひの時間」  
 掃部伊津子

・核心からそれた話だ首のなきしほから蜻蛉が窓辺で動く  
 ・記憶から消したきものをぞろぞろと引きつれてくる法要の席  
 一見、ふつうの情景の見たままを書いたようだが、触覚だとか体感覚だとか温感だとか、ふつうはあまり意識されない、ことば以前のものとして感じ取るよう

な感触が読み取られている。夢のなかで感じる感覚に近いようでもある。すぐれて個性的な作品群である。

尾花栄子

「赤いへべ着て」  
 ・雪雲の及びて昏き本堂に誰が忘れしか黒き手袋  
 ・昏れてゆく心に灯る古里の数多の水子地蔵に逢えり  
 伝統的な読み口の作品が多く、安心して読めるが、それが少し物足りないと言えたい。記憶の中の光景のようでもあり静かな日々が、静かに詠まれている。全体としては、個々の作品の発想をさらに多様にすることも考えられる。

小林まや

「星を撮る人」  
 ・夕日さす窓辺に寄りて新婚の課長は弁当袋を開く  
 ・里芋を箸で上手につかまえて父親サムは子に食べさせる  
 見たままの光景を詠んだようでも、その光景に意外性があると驚き生まれ、詩情が生じる。一連には、明るく微笑ましい雰囲気を感じられる。ただ、似たようなまとまり方で終わっている場合が多く、一首ごとの集中力を高めたい。

五感を総動員せよ

小林 幹也

近代以降、写実、写実といわれ過ぎたせいで、私たち歌人は、どうしても視覚偏重になりがちである。しかしそもそも短歌は視覚だけでなく、五感を総動員してつくるべきものである。廣庭由利子の「飛驒追遠」はその点、飛驒という土地を見るだけでなく、聞き、味わっている。

・高山の夕べを向かふバスで聞く宿儺かぼちやのプディングの味  
 ・榎の実は秋の深まるまで待てと店主は陣屋のすぎこし語る  
 岡本光代の「白き闇」にも五感を研ぎ澄まして詠んだ歌が見られた。  
 ・目覚めたる朝床にひて計るなり音を吸ひこむ積雪の嵩  
 その他、自然と人事が共鳴する歌に注目した。

・つくばひに張りたる水まだ融けぬ耐へてゐるのはわれのみならず  
 岸本万由美の「老いの流儀」であるが、老後のささやかな楽しみを静かな口調で詠み、印象的であった。

・白壁に人影動き月高し心まで澄む秋夜の冷えに  
 ・傍らに在りて気づかぬ平凡を今宵の月が照らしくれたり  
 矢内温代の「白き飛沫」。戦後の朝鮮からの引揚げ体験を詠み、注目した。  
 ・空に星のあること教へくれし父引揚げ途上の野宿の夜に  
 ・五歳児のわれははじめて死を知りぬ引揚げ船の水葬を見て  
 こういった歌は、主義主張や思想を前面に出して詠むより、敢えてそれらを抑え、淡々と具体的に詠み進めた方が、説得力が増す。そこからじみ出てくるものがあるからだ。やや主張が先走ってしまった後半の歌が惜しまれる。

さびの部分と構合力

尾崎 まゆみ

山田恵子

「飛べない猫」

- ・眠らせた想いを昔の流行り歌サビ効かせつつリフレインする
- ・電話ならやさしい椅子になれるのに会えばとんがる私の部品
- ・流行り歌のサビの部分のはなやかさと、ういういさに惹かれ、私は一位に押し上げた。小さい町の日常の場面の描写も、きらきらとひかっていた。構成に気を付けて、時間の流れ、あるいは起承転結を見せるとぐっと引き締まる。

老月良一

「紡がれたもの」

- ・玄関の自動扉の溝の中いつはまりたり団子虫達
- ・未来へと形見を遺す生きたこと愛したこと紡がれたもの
- ・非情なるものへの冷静な眼差し、未来へと紡がれる生命への思い、一首一首の完成度は高く魅力的。散漫な印象が生まれてしまったのが惜しまれる。

福山裕恵

「廃線鉄路」

- ・小春日に温む廃線枕木をふめば硬骨祖父の背に似る
- ・おのが影踏みつつたどる廃線に土手の荒草みどりをはわす
- ・廃線鉄路への粘りづよい取り組みが魅力。場面の切り取りや、描写力も優れているので、郷愁に満ちた風景がしっかりと見えてくる。ただ「廃線」という言葉が二十首のうちの十八首にあるのはやはり気になる。

上月しげ子

「上月家のねこ」

- ・十二支に猫のなきゆゑ年の瀬は端居をなしたためきねいりす
- ・ニンゲンの観察力は漱石のネコに僕たちおとらず候
- ・構合力も、表現力もある作品。猫を主役にした物語が見えてきて、一気に読ませる力もある。一首の完成度も高い。ウィットに富む一連は貴重。

ひとつなる影

黒崎 由起子

上條翔太

「ドロー、ゆるやかに」

- ・このままじゃ巨人になつてしまうから早く縛つて首を落として
- ・古い本で切った人さし指の血がページに滲みて僕は本になる
- ・得体の知れない焦燥がふくらみ巨大化し、この苦しみから逃れるには僕自身の手を落とすしかないという絶望感。自らの血に滲んでいく本はもう僕だという無機質な感覚、コントロールできず暴走しそうな若さが魅力的である。

渡邊大貴

「闇に消えゆく眠り姫たち」

- ・人が死ぬ自宅近くの踏切音聴きながらにして過ごす夏の日
- ・出来損ないの人間が出来損ないのフルーツを闇引く果樹園
- ・ありふれた街の光景が作者の手で異常な空間と化す。足先のない男、ほしのか

がやきはまやかし、アンドロギュヌス、寧馨児、不連続自傷、眠り姫 と自虐的に散りばめられた言葉が独自の世界を構築しており心惹かれた一連。

新家イサ子

「白壁の扉」

- ・手に掬い持ち帰りたい今日の空川辺において猫が水飲む
- ・冬の日の明るき障子に揺れている洗濯ばさみのひとつなる影
- ・雪国での暮らしが慎ましく語られる一連。しんと冷えた冬の空気なかで共に生きる鳥・猫・蛾・雀などに向けられる視線が優しい。障子に映る洗濯ばさみの影が大きく小さく揺れるさまが、ふと冬の暮らしの翳りをみせた。

石飛俊郎

「禍福はゼロサム」

- ・不器用な曲り方しか出来ません頑迷固陋吾が生れ性
- ・巻き戻し出来ぬ人生はて近し 一方通行逆走したり
- ・不器用、頑迷固陋、逆走、逆転と一連には否定的な言葉が見られるが、結局は「禍福はゼロサム」であるという人生への肯定感に救われる。戦中戦後を生き現在の複雑な国際情勢にも思いを馳せる七十五年の歳月が重い。

一語、一句の緊密さと広がり

安藤 直彦

・法を聴く一會うしなふ哀しみは世尊に会へざる悲しみのごと

・半世経る倒る古木にひこばえの花咲き出づる雲たつる山

・大塚公夫氏「ひこばえ」。全体、仏道に仕えての誠実な作。後の歌、「経る」「倒る」「出づる」など、一語一句の繋がりが硬く、詰まりすぎではないか。

・語の繋がりに隙間をとって、「想」に広がりを持たせてみてはどうだろう。

・一枚の水面を羽織り立ちあがる背中に描く 透明水彩

・愛されていたのだからうかもしかして 男の身体と同じ水温

・山田 麦氏「透明水彩 bathroom」。一連、テーマ性のはつきりした物語仕立てのユニークさ。密室での入浴の一コマを二十首に詠みこなすところ並々ならぬ気配があり注目した。一連の構成上、中心になる作があと二、三首ほしい。

・心だけ貴方に触れていいですか梅の蕾がふくらんできます

・あれもはて此れも違つと思えども言いたき事も老いてはよそう

・武内米子氏「黒い靴」。口語律のさらりとした歌い方が武内さんの本領か。へ下がり公孫樹並木の葉の隙間ゆれる日差しを日傘に写す など面白い。「思えども言いたき」など文語体まじりのものは今一つ表現面が課題か。

・花の谷春こそよけれ香に満つる花冷えのなかりキウバイ咲く

・可憐なるヒトツバタゴの花咲きて今朝も聞かざるナンジャモンジャ

・山口泰仙氏「仲間」。公園の花木を長年世話されて一連全体にその愛情がよくそがれている。一首目はよく徹しているが、二首目は上句と下句が呼応していない。「可憐なる」などパターン化表現は避けたいところ。

・可憐なるヒトツバタゴの花咲きて今朝も聞かざるナンジャモンジャ

・山口泰仙氏「仲間」。公園の花木を長年世話されて一連全体にその愛情がよくそがれている。一首目はよく徹しているが、二首目は上句と下句が呼応していない。「可憐なる」などパターン化表現は避けたいところ。

人間として何を感じ・どう表現するか

小畑 庸子

吉永明代

「いびつな真珠」
・ヴィバルディ・春の歓び始まりぬ八分音譜はヴィオラに乗って
軽快に始まる一連は、コンサートでの取材による。序から静かに昂りへと向かい、後半で内部表現へと移る。最後までドラマティックに詠み、テーマから外れない。二杯めのマルガリータを飲み干してガラスの靴は右を残そう」と、最後の作品で締め括った。序・破・急が効いていて読者を飽きさせない。

「青いガラスのかげら」

遠藤瑛子

・背伸びして真昼の月に届くよう白木蓮のこぶしが開く
白木蓮を表現することによって、自らを象徴的に詠んだ。下句は「白木蓮はこぶしを開く」と主体を明確に。縁側の藤椅子すずし読み終えた『額田王』すべり落ちたりも好きな作品。第三句は不要であろう。

「此処に在りし」

太田富美恵

・枯葎の根元のうすら氷を分けながら鴨は二月の水に入りゆく
景が丹念に抒されている。小鳥を素材とした作品が多く、作者の生活環境が想像できる。春はまっすこに來てをり雪におくふたつ鶺鴒のかげ透きとほるもよい。タイトルは「かげ透きとほる」のほうがよかったか。

「等間隔の影」

宮城十子

・世紀末海の底にて眠るのか指より零るる須磨の白砂
・月光に雪原のリフト伸ばしたる等間隔の影乱すものなし
一連から、作者は学校関係の仕事に従事していると解るが、読者は作者の個人的情報よりも、人間として何を感じ、それをどう表現するかに興味と関心をもつ。拙出歌のように詠める作者である。次回も必ず作品を見せて欲しい。

言葉を絞る

中川 昭

南 輝子

「生きえたり」
・肺ひらくメスのぎんいろ記憶せむ銀色文字の聖刻として
・そりりそりりゆるゆる玉の緒のいのちへとほれ粥のひと匙
死の淵から生還したらしい作者の、やや感情移入の濃い一連だが、メスを聖刻と捉えた感覚は余りに非凡。二首目の結句、一匙の生の喜びを結んだ。

矢野一代

「冬季雷」
・夕闇に稜線は溶け空と山とぼりをおろす前の蜜月
・子の宮を持たぬ桜もみどり子の若葉遊ばす春きたるべし
叙景が心象に変わって「蜜月」のはかなさを主張している。人の世の裏と表の表白だ。子宮を持たない桜が次々と葉を茂らす感覚も特異と言える。

「暗証番号」

矢野義信

・無沙汰にも程があるという母の長き電話を妻が聞かされており
・エレベーター乗るにも暗証番号を押す施設なれど母を託しぬ
母と息子とその妻と。現代家族の縮図にのぞく男の姿が切なく美しい。ただ「いう・言う」「と・言う」の頻度が気になる。歌の説明はいまじめたい。

「ムーヴィング・ウォーク」

斎藤和子

・鉦叩きの遠慮勝ちなる鉦の音野分すぎたる闇より聞ゆ
・秋風と共に入り来し鼓笛隊赤白帽が進んでゆきぬ
アンニュイな日常を歌って自尊心を失わない作者。叩きの鉦を鳴らすかのように「遠慮勝ち」に鳴く虫の音と鼓笛隊の行進は、対称的な生の律動である。

「九十九年」

生田律子

・岡山のニュアンス少し残しつつ関西弁に会話する母
・人格に等級つけてゆくように母の介護度三と線引く
具体的で丁寧で語順に乱れがない。基礎のできている人。平板な素材のようだが、故郷と異郷の弁に年を経た者の哀感、人格を等級で分ける非人間的な制度のありようを突く静かな批判が重い。五氏共にもつと言葉を絞るべし。

受贈歌集・歌書

☆『介護日和』

水谷きく子

☆合同歌集『どるふいん』第13号

9月15日 北羊館
生命終わる日を知らざれば今日の日を老いなきびしき言葉もかくる

☆合同歌集『ともしび』

9月15日 本阿弥書店
波の音は父の守歌砂浜にピアノ、ピアノニツシモ寄せては返す

☆『歌人のまなざし』

9月25日 角川学芸出版
「広辞苑」ひらく時間のゆたかにて澄みつつ光ることばの銀河

☆『長月』

9月23日 ながらみ書房
ふるさとへ帰ることくの幾世代 鯨の遠き祖先は海へ

☆『自選歌集『ふれあい』27号

10月10日 ブイッソリユシヨソ
「一音詩の世界」

☆『だんじり』

10月23日 ながらみ書房
ふるさとへ帰ることくの幾世代 鯨の遠き祖先は海へ

☆『だんじり』

9月1日 北羊館
正月に帰らぬ人も九月にはだんじり曳き手の街の顔なる

☆『だんじり』
9月1日 北羊館
正月に帰らぬ人も九月にはだんじり曳き手の街の顔なる

「第2回歌集批評会記 小林幹也」

「第2回批評会」は、平成26年6月21日(土)に兵庫県勤労市民センター第3会議室にて行われた。出席者52名。

まず、小畑庸子歌集『白い炎』が取り上げられた。小畑の歌は、一見、作者の立ち位置が分からないくらい、個人の思いを抑制した形でつくられている。あるいは自己という殻を破り、自然と一体化した詠み方といえよう。

一村を沈めし過去を嘖きあぐる(あつ)あつ白き炎となりて『白い炎』という題名のもととなった右の歌にも、その特徴は顕著に見られるが、レポーターの桂保子氏は、さらにこの歌の後に「底ひなる木木も巣箱も犬小屋もしろき声あぐ霧のあしたは」という歌がつづき、連作としての味わいがあることを指摘した。

次に、尾崎まゆみ歌集『綺麗な指』について、レポーターの楠誓英氏は、作者が幻想派といわれる塚本邦雄の門下でありながら、父の病氣、その後の死と、作者の個人的な生活がにじみ出るように詠まれている点に注目した。  
・ああ雪と弟の声ゆれながら  
ひえた板の父に降る降る

その後、この歌の「ひえた板」と【ヒ】音を重ねる手法その他の韻律の問題をも含め、会場の参加者をまじえ、活発な議論が重ねられた。司会が私がつとめた。充実した会だったと思う。

「第3回歌集批評会記 南 輝子」

平成26年9月13日

(於)兵庫県勤労市民センター 兵庫県歌人クラブ「歌集批評会」は好評のうちに第3回を迎え、満員の会場は若い世代も多く熱気に包まれた。今回は藤本則子歌集『蝸牛も過客』と楠誓英歌集『青昏抄』。レポーターはそれぞれ田中教子氏、小林幹也氏、司会は中川昭氏。

藤本歌集は、私を詠む近代短歌よりも私がかもろにでない上代の擬人法「寄物」に近いと田中氏は捉える。つまり人物が物に寄せて物の中に私を投射させる歌の形である。春夏秋冬日常生活における時間の経過がよく捉えられており、生から死へ向かう中で過去があり未来がある。このような私を消して表現する歌のあり方は、いまいちど考えてみるべきではないかと田中氏は語った。美しく静かな味わい深い歌集である。

・白梅の一輪が噴く音したり

椿も繭も寝ねたる夜半  
・砂時計の砂落つる音に春が来る  
梅花のかたちの切り貼り障子  
楠氏は31歳。本歌集は「第1回現代短歌賞」受賞作である。はじめに小林氏は鋭く指摘された。最近の新人は特殊が見受けられるが、楠氏にはそのような一回性でなく、正統派といえる清々しい普遍性がある。真の写実として、見るだけでなく五感で感じ、若さに自覚的であろうとする。音をうまく使い、現実から幻想の世界へ比喩をとぼす。あるいは父兄私の関係を通して人間とは世界とはを掴もうとする。兄の死、闇、影も、いずれば乗り越えてゆける健康的な暗さと捉えられる、と小林氏は語る。

・側溝を這ひのぼりゆく青き蛇 思春期とはいいつ終はるのだらう  
・垂れ下がる瘤も妻も気にならずラクダの雄は陽に目を細める  
会場からは発言が相次ぎ、95年阪神大震災と97年神戸少年事件が思春期の少年に及ぼした影響への問いかけもあり、中身の濃い充実した批評会となった。次回への期待が一層たかまっている。

が一層たかまっている。

地区通信

【阪神】5月24日、尼崎歌人クラブは尼崎市中小企業センターにて総会及び講演会を開催。「歌の転機」と題して澤村斉美氏が講演。中野昭子、兎田孝子、佐々木春美各氏他60名出席。▼6月8日、吹田市メイシアターにて吹田市短歌大会開催。選評の藤井幸子氏他95名が参加。16、17日、日航ホテル姫路にて「青天短歌会」の一泊歌会開催。県下より、北浄代、上月昭弘、下村千里、土居正、中舎勝代、藤本千恵子、藤沢喜美代、丸岡哲朗、矢野昭子各氏ら15名参加。▼7月20日、ランド白楽天にて廣庭由利子歌集『黒耶悉茗』の合評会と出版記念会開催。合評会パネラーは林和清、中津昌子、永田淳各氏。記念会司会は小林幹也氏。多方面より多数参加。

(たなかみち)  
【神戸】5月8日、中山寺宝蔵院にて薫風兵庫合同歌会開催。▼5月31、6月1日名鉄グランドホテルにて長風全国大会開催。黒崎由起子、吉田千代美、甘田千春各氏ら6名参加。▼7月1日、文学圏は七百号記念特集号を発行。10日、姫路商工会議所にて祝賀会開催。12日、兵庫県民会館にて半どんの会文化賞の贈呈式開催。文学圏が文化賞を受賞。下村千里氏他12名出席。16日、神戸文化ホールにおいてNHK神戸市短歌大会開催。佐佐木幸綱氏の講演、大塚寅彦、栗木京子、穂村弘、安森敏隆、安藤直彦、黒崎由起子各氏選評。参加者300余名。

▼8月5、6日、弘前市ベストウエスタンホテルにて潮音東北大会開催。石橋妙子氏他12名参加。▼9月10日、不忍通りふれあい会館にて日本短歌雑誌連盟理事会に三津野幸代氏出席。▼10月11、12日、市川グランドホテルにて海市全国大会開催。20日、徳



徳

### 2014年度 兵庫県歌人クラブ 「兵庫短歌賞」作品募集要項

- 資格** 兵庫県歌人クラブ会員及び県下在住・在勤・在学者・関係者
- 作品式** 未発表短歌20首
1. 作品はA4判 400字詰め原稿用紙2枚に浄書、右肩を綴じる。
  2. 1枚目の欄外に作品表題と新旧仮名遣い別を記入する
  3. 作品表題・氏名・生年月日・郵便番号・住所・電話番号・所属結社名を記入した表紙をつける
  4. 封筒の表に「兵庫短歌賞応募作品」と朱書きする
- 応募料** 2,000円(作品に同封、切手不可)
- 締切宛先** 2015年1月30日(消印有効)  
〒666-0261 川辺郡猪名川町松尾台4-4-33 吉野節子方
- 兵庫県歌人クラブ「兵庫短歌賞」係
- 選考発表** 兵庫県歌人クラブ兵庫短歌賞選考委員会  
会報第193号紙上  
2015年4月29日 兵庫県歌人クラブ総会、神戸短歌祭会場

※昨年度より、今までの「新人賞」の呼称を改め、「兵庫短歌賞」とし、その中に「兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞」を設け、年度作品によって選考委員会が判断(「該当無し」の場合もある)することとなりました。

島市宅宮神社にて石橋妙子氏歌碑除幕式が行われ、安藤直彦氏他70名出席。29日、文学圏は赤穂市の赤穂義士ゆかりの地、相生文学碑の森などへ吟行。参加者20名。(黒崎由起子)

**【明石】** 5月24日、明石勤労福祉会館にて明石ペンクラブ総会開催。出席者14名。作品集「明石大門」34号発刊。特集「続万葉歌碑をめぐる」では、昨年に引き続き明石市内の万葉歌碑の3箇所を伊藤敦子

氏が記事担当。▼8月23日、明石勤労福祉会館にて明石ペンクラブ例会を開催。「明石大門」34号の短歌部門の合評会にて野瀬昭二、伊藤敦子両氏の作品が取り上げられる。(伊藤敦子)

**【姫路】** 10月26日、西播磨文化会館にて平成26年度西播磨短歌祭開催。内海永子、上田一成、飯田進各氏が選歌及び講評。▼11月6日、上田一成氏は上郡町千種川学園短歌部の講師を務める。10日、姫

路市民会館にて第25回合同歌会を開催。神保原廣己、小松カヅ子、内海永子、西村久代各氏の他80余名が参加。(上田一成)

**【東播】** 7月8〜30日、稲美町ふれあい交流館にて茅花短歌会全会員の短冊を展示。▼8月8日、京都府民ホールにて行われた冷泉家時雨亭文庫主催の「乙巧奠(きこうてん)」に松田和薫、前田昭子両氏他4名出席。▼9月17日、稲美町天満小学校にて茅

花短歌会より8名が6年生の短歌指導を行う。25日、久米川孝子氏(コスモス)は第6歌集『ことばの銀河』(角川文芸出版)刊行。▼12月7日アルカディア市ヶ谷にて行われるコスモス会員著書合同出版記念会に久米川孝子氏出席。講評小島ゆかり氏。(前田昭子)

**【中播】** 4月19〜20日、水襲姫路支社は水襲全国大会in名古屋に小畑庸子、生田よしえ両氏他4名出席。▼5月18日、水襲姫路支社は小畑庸子歌集『白い炎』出版を祝う会(姫路キャッスルホテル)を開催。100名出席。▼7月、吉永明代氏(水襲)は産経新聞社主催第20回与謝野晶子短歌賞受賞。16日、NHK学園生涯学習フェスティバル神戸短歌祭にて、吉永明代氏秀作。岸本万由美、石口さよ子両氏入選。31日、小畑庸子氏は兵庫県教員免許更新講座(姫路獨協大学)「心を開く表現」の講師を務める。▼8月2日、福崎町文化センターにおいて第29回山桃忌奉賛短歌祭開催。出詠301首。入賞山本君子、松田容典両氏他6名。選歌と選評は楠田立身氏。▼10月4日、吉永明代氏(水襲)は第17回小浜市山川登美子記念短歌大会にて佳作賞。▼11月21日、小畑庸子氏は加古川刑務所篤志委員として長年の短歌等の指導の業績に対し法務大臣表彰を受ける。(生田よしえ)

**【北播】** 6月7日、小野市市のおい交流館エクラにて第6回小野市詩歌文学賞・第25回上田三四二記念小野市短歌フォーラム開催。詩歌文学賞(短歌部門)小島ゆかり氏。応募数一般の部1431首、学生の部5091首。入選者一般の部一席加藤トシ子氏(秋田県)、学生の部一席前田栞那さん(小野市市場小1年)。出席者小野市長蓬萊務馬場あき子、宇多喜代子、永田和宏、高野公彦、伊藤一彦各氏等450名。29日、多可町加美コミュニティプラザにて第57回北播短歌大会開催。応募数一般の部243首、学生の部31首。入選者一般の部多可町長賞上月しげ子氏(加東市)、学生の部入選棚倉涼華さん(八千代中2年)他10名。出席者多可町長戸田善規氏他81名。▼9月20日、平成26年度小野市文化祭芸芸大会短歌の部をコミセンおのにて開催。応募歌63首。市長賞山中幸代氏(稲美町)。出席者25名。▼10月12日、第58回西脇市短歌大会を市総合市民センターにて開催。応募

歌一般の部180首、学生の部253首。選者一般の部藤岡成子氏、学生の部西脇短歌会。一般の部特選一席肥後隆子氏(加古川市)、学生の部特選門上喜彦さん(西脇市楠丘小6年)他2名。出席者20名。(松尾鹿次)

【西播】▼6月22日、佐用文化の会(短歌・俳句)は阪南西行終焉の地などへ吟行旅行。新家、菅原、安藤各氏他40名参加。▼9月6日、新家イサ子氏佐用町立德久小学校へ短

歌指導。▼10月4日、安藤直彦氏佐用町立上月小学校へ短歌指導。▼9月28日、作用情報センターにて佐用郡秋季短歌大会開催。大会賞上村哲代氏。安藤直彦、尾上節子、新家イサ子、菅原艶子、船引貴明、吉田照子各氏他35名参加。▼11月1日、佐用情報センターにて佐用文化祭短歌大会開催。大会賞吉田照子氏。安藤、新家、菅原各氏他20名参加。(安藤直彦)

【但馬】9月23日、「前田純孝賞」創設20年記念・歌碑巡り。▼10月16〜17日、城崎温泉リバーサイドホテルにて但丹歌人会「秋の大会」開催。講師尾崎まゆみ氏。▼11月9日、朝来市大蔵市民会館にて竹柏会「心の花」主催「じろはつたんの里歌会」開催。▼11月15日、但馬文教府にて「但馬文学のつどい」開催。(足立勝蔵)

【淡路】8月、『はちこう歌集第2集』刊行。平成20〜26年までの作品1012首を収

録。▼10月6日、大木津多代氏(東浦短歌会)第15回隈岐後鳥羽院短歌大賞受賞。26日、洲本図書館図書館祭にて淡路歌人クラブ短歌教室開催。12名参加。▼11月3日、合同歌集『給水塔40輯』(東浦短歌会)刊行。17名、365首収録。(来田 務)

(お送り戴いた通信は会報の形式にそって編集させていただきます。)

### 石橋妙子氏歌碑建立

このたび花鏡短歌会主宰石橋妙子師歌碑除幕式に安藤代表のご列席を賜りまことに有難うございました。

昨年春、石橋先生の歌碑の夢を見たというMさんの話から、徳島在住のOさんが早速場所を探すなど、とんとん拍子に話がすすみ歌碑建立実行委員会を立ちあげ建立基金への浄財を呼びかけました。

石橋先生の歌碑は二基目に当りますが、一基目は福崎の応聖寺のご住職が歌集『白栲』に感動し歌碑建立を懇望されたものであり、

今回の歌碑が花鏡短歌会として初めて建立出来た歌碑であります。潮境きはやかに延び渡り



ゆく四国詩の国風韻きあふ

「四国死の国」と歌う歌人もある中で「四国詩の国」と詠まれた石橋先生の力強く凛とした揮毫の彫りは黒みかげに調和して高さ一・

六メートル幅一・三メートルの見事な歌碑を徳島市上八万の宅宮(えのみや)神社の境内に建立出来ました。十月二十日の除幕式は六十名の方々がご参集下さり宅宮神社宮司による神事と除幕式を無事終え、あとはホテルクレメントでの祝賀会場に移りました。安藤代表はじめ来賓のお祝辞を頂き、鏡割をして乾杯、お祝気分大いにあがり祝電披露続いて花鏡会員の言祝の歌を一人ずつ詠みあげたあと、突然の指名で増井の黒田節(二番はいろは句へど)を吟じ午後四時半、一切の行事を終りました。

増井定子

### 受贈歌誌・会報等

印南野文華、海市、薫風、幻桃、コスモス姫路、梧葉、五月風、佐用文化、白珠、すずかけ、青天、象、但馬人の歌、丹生、但丹歌人、ちぬの海、茅花、津布良、鶯が城便り、とべら、鳥、白圭、波濤神戸、花鏡、鱧と水仙、薔薇、飛聲、ひめぢ水襲、文学園、ポトナム姫路、美加志保、夢、旅笛、林間、玲瓏、礫、六甲、尼崎歌人クラブ会報、石川県歌人、大分県歌人クラブ会報、京都歌人協会報、短歌堺会報、新潟県歌人クラブ会報、西宮歌人協会会報、日本歌人クラブ会誌「風」、大和歌人

### 第4回「歌集批評会」のお知らせ

平成27年2月21日(土) 13時〜16時半  
兵庫勤労市民センター  
久米川孝子歌集  
『ことばの銀河』  
(レポーター) 渡合けい子氏  
・武富純一歌集『鯨の祖先』  
(レポーター) 小谷博泰氏  
・問合せ先 安藤直彦代表

神戸市短歌大会

武富純一

7月16日(水)、神戸文化ホールで神戸市短歌大会(主催 NHK学園 神



2015年度神戸短歌祭のお知らせ

日時 2015年4月29日(祝日)  
13:00~16:00

場所 兵庫県民会館 11Fパルテホール

内容 \*「兵庫短歌賞・新人賞」表彰式・  
選考経過報告  
\*総会  
\*シンポジウム  
テーマ  
「短歌にとって『美』とは何か—  
阿木津 英氏を囲んで」(仮称)  
パネラー 阿木津 英、江畑 實、  
中川 昭、他未定

戸市)が開催された。開場を待ちかねた大勢の聴衆でホールは満員となる。佐佐木幸綱氏の講演「作歌の現場」阪神淡路大震災から二十年」のあと、大塚寅彦、栗木京子、佐佐木幸綱、穂村弘、安森敏隆各氏(五十音順)が、全国から寄せられた三千余首より選んだ作品を講評し、表彰式が行われた。また「当日詠」260余首の作品は安藤黒崎両氏により選歌され講評された。(入賞作品は伊藤敦子、三宅隆子両氏が墨書し会場に掲示)

二部に渡る講評に参加者は熱心に耳を傾け、盛会裡に終了した。

《大賞》

・朝刊の中より黒蟻一匹がここはどこだと紙面を走る 山口県 中村蓉子

・妹がそれは恋だと断言しゆっくり回り始める風車 富山県 松田梨子  
・浜辺にはゴツホのような鶉が一羽立ちておりたり文月の朝 愛知県 笠井忠政

《秀作》(兵庫県歌人クラブ会員関係)

・難しく考えなくていいのよとひらひら消えた黄色い蝶々 西塚洋子  
・祭りよりもどる次男はいつからかカメも金魚も連れて帰らず 武富純一  
・再稼働はじめにありき原発にふるさと追はれ流亡われら 増井定子  
・ひとやすみしては畑を打ちまくる体まるごと備中鍬として 上月しげ子  
・漬物石ならばとつくに捨てたるう老犬黒兵衛抱いて散歩す 高井忠明  
・中天の青き穴より糸垂らし地球釣り上ぐ赤きクレーン 吉永明代

☆ 新年懇親会のご案内 ☆

恒例の新年懇親会を下記のように開催します。  
お誘いあわせの上ふるってご参加ください。  
記

日時 平成27年1月11日(日)

会場 神戸東急イン3F  
(JR三宮駅勤労会館西側)  
TEL078-291-0109

会費 7500円(当日受付)

申込 1月4日までに下記宛てにお申し込み下さい。  
〒673-0424  
三木市自由が丘本町2-232  
兼貞方  
兵庫県歌人クラブ「新年会」係  
TEL0794-83-0803

《当日詠入選》「神戸の夏を詠む」

安藤直彦選

《特選》

・風見鶏をゆるく廻して風渡りここより街は海へ傾斜す 兵庫県 内海永子

・まっすぐに行けば海へとつづく路病友に会ひたく左へ折れる 兵庫県 福井弘子

《秀作》

・海よりの風吹くなへに須磨の浦見え隠れつつ点る漁火 兵庫県 松田芳子  
・沈む日は黄砂の白き暈を着て明石海峡の架線に懸かる 兵庫県 後藤政基

黒崎由起子選

《特選》

・祈りあり祈る人あり夕闇のモスクに青き影を伸ばして 兵庫県 種田淑子  
・五分ほど歩けば海と聞いたから日傘で歩くルソー見たあと 大阪府 榎本圭子

《秀作》

・路地ぬけて駆けて追ひたる花電車長田久保町路地を遺せり 兵庫県 伊藤敦子  
・すれ違いしロマンスグレーに覚えあり互いに振り向く北野の坂道 兵庫県 水守紀子

◇余滴◇

示唆に富む数々の玉稿を掲載致しました。兵庫短歌賞へのご応募をお待ちしております。  
(森嶋・山中)